

氏名:	吉村 隆
学位の種類:	博士(看護学)
学位授与年月日:	平成26年3月8日
学位記番号:	第18号
学位授与の要件:	学位規則第4条第1項該当
論文題目:	里山におけるソーシャル・キャピタルの特徴と健康への影響 The health effects and characteristics of social capital in SATOYAMA
指導教員:	教授 北山 秋雄
副指導教員:	教授 安田 貴恵子
論文審査委員:	主査 教授 清水 嘉子 副査 教授 岡田 実 副査 教授 西垣内 磨留美 副査 教授 喬 炎 副査 教授 北山 秋雄

論文内容の要旨

背景

わが国のコミュニティの弱体化が指摘される中、近年ソーシャル・キャピタル (Social capital、以下 SC) という概念と健康との関連が注目されるようになった。しかし、中山間地域の SC の傾向を捉え、健康との関連を検証した研究は極めて少ない。そこで本研究は、研究 I で中山間地域の人々の暮らしを入念に調査して SC の特徴を探り、研究 II で里山の SC の特徴と健康への影響を探究した。

【研究 I】

研究目的

里山の住民へインタビューを実施し、その暮らしの実態から SC の特徴を探るとともに、SC に関する調査票を作成する。

研究方法

中山間地域に 30 年以上居住する高齢者 10 名を対象に、予備調査で作成したインタビューガイドを使用し半構成的インタビューを実施。データは質的帰納的に分析をおこなった。調査期間：2010 年 9 月から 2011 年 11 月。

結果

分析の結果、総コード数 727、サブカテゴリ総数 36、カテゴリ総数 14 が導き出された。各カテゴリは、4 つの領域、“近所を中心とする人間関係を説明するもの” “地域への意識・態度を説明するもの” “地域内の関係性を説明するもの” “自然との関係性を説明するもの” となった。

考察

14 のカテゴリ間の関連性を構造化して検討したところ、4 つのカテゴリの重要性が示唆された。また、本研究で自然関連要因が里山の SC に関連する可能性があるものとして導き出

されたことは注目された。近所関係を中心したネットワークの維持には、日常生活において生じる困難に対し人々が関わりあって生きてきたという里山の暮らしが深く関連していたため、こうした要素が SC の構築や維持に関して重要なものとなる可能性を内在していると考えられた。また “ふれあい” や “絆” といった言葉で象徴されるような人と人との関係性や、その土地の歴史や文化に関わること、あるいは、地域内の関係性における他者に協力し寄り添いながら生きている個々人の存在と、その関係性を受け入れられる集落の姿も SC と密接に関連していることが窺われた。そして、里山の自然と共にある暮らしや、その暮らしから発達する規範は、自助・共助を促し結束と協同的な行動を生じさせやすくしていると考えられた。さらに、集落の自然が個人の健康状態、あるいは健康観に影響を与えていることを示唆する語りは、基礎的生活空間に存在する自然そのものが、人々の暮らしをより豊かにする実質的な資本として存在していることを示唆するものであった。また、調査項目は、全てのカテゴリーおよびサブカテゴリーを列挙し意味内容を確認した上で、各カテゴリーの情報が得られる項目を作成した。この過程では、既存の調査項目で各カテゴリーに関する情報が得られる場合は既存の調査項目を採用し、情報が得られない場合には、各カテゴリーに関する概念を明確にした上で調査項目を作成した。こうして、SC に関連する 36 の調査項目を作成した。

【研究Ⅱ】

研究目的

研究Ⅰで得た知見を踏まえ、量的調査をおこない里山の SC の構成要素、関連性を明確にすることでその存在様態を捉え、健康への影響を検証する。

研究方法

里山（4 地区）および都市的地域（1 町内会）に居住する 40 歳以上の男女 427 名を対象に自記式質問紙調査を実施。調査内容は、個人の属性（10 項目）、SC に関連する項目（36 項目）、健康関連 QOL（8 項目）。調査結果を因子分析（プロマックス回転、最尤法）し、因子構造および因子得点の分析をおこなった。その後、健康状態のアウトカム指標である健康関連 QOL（SF-8）を従属変数、因子分析により得られた下位尺度を独立変数として重回帰分析をおこなった。調査期間：2012 年 7 月下旬～9 月上旬。

結果

調査票は里山と都市的地域の居住者合計 682 名に配布し、427 名から有効回答を得た（有効回答率 62.6%）。因子分析の結果、里山では 5 因子構造（第 1 因子：近所関係の質、第 2 因子：地域への愛着、第 3 因子：自然との共生、第 4 因子：信頼感、第 5 因子：地域参加）、都市的地域では 4 因子構造（第 1 因子：近所関係の質、第 2 因子：地域への愛着、第 3 因子：自然との共生、第 4 因子：信頼感）となった。両地域の因子得点の分析（Mann-Whitney 検定）を行った結果、都市的地域よりも里山の方が有意に高い下位尺度得点を示したのは、第 1 因子「近所関係の質」（ $p < .001$ ）、第 3 因子「自然との共生」（ $p < .001$ ）、第 4 因子「信頼感」（ $p < .001$ ）、第 5 因子「地域参加」（ $p < .001$ ）であった。健康関連 QOL（SF-8）の 2 つのサマリースコアを従属変数とし、SC の各因子を独立変数として重回帰分析をおこなった結果、里山に特徴的であったのは精神的サマリースコアと第 2 因子「地域への愛着」（ $p < .05$ ）との関係性であった。

考察

分析の結果、里山の因子構造はわが国の中山間地域の SC の構造をおおよそ反映していると

考えられた。これを踏まえると、里山では緊密で凝縮された近所関係があることが特徴的であると考えられた。また、両地域の因子得点と因子相関を検証したところ、里山においては社会文化的脈絡を反映した SC の構成要素が存在し、その中でも「自然との共生」が重要な要素のひとつになる可能性があると思われた。重回帰分析の結果、里山では持ちつ持たれつ、お互い様という認識から生まれる様々な相互関係が、精神的サマリースコアを高める可能性がある一方で、身体的サマリースコアと有意な関連のある独立変数はなかった。

これらのことから、里山には社会文化的脈絡を反映した SC の構成要素が存在する可能性があり、その中でも自然の存在が重要なものになることが定性的な分析に加え定量的な分析からも示唆された。したがって、里山の SC は、自然環境そのものを含み、自然との調和・共生を旨とする社会生活から創出される、信頼、規範、ネットワークといった、自然と人間あるいは人間同士の結びつきを強める様な機能をもつものと考えられる。

看護への示唆

本研究結果から、地域看護活動への示唆として以下のことが考えられる。

1. 里山の SC は、地域の各種統計資料などといった量的情報からだけでは十分に把握できないため、質的情報を重視することが重要である。
2. 本研究では「人間関係の絆」や「集落のまとまり」などの4つのカテゴリーの重要性が示唆された。したがって、これらのカテゴリーに関連する要素を、施策に関連する資源として捉え、積極的に地域の保健施策に活用することが望まれる。こうした活動の積み重ねが、地域住民の健康問題をその地域の伝統や風土と結び付けて理解し、個人や環境に働きかけながら地域全体の健康水準の向上をもたらす活動につながっていくと考えられる。
3. 本研究で里山の SC には、多様な存在様態があることを示唆する結果が得られたことを踏まえると、その本質的な要素を捉えることは容易ではない。また、今日の専門職の医療・介護・福祉部門等への分散配置を考えれば、里山の SC が各分野に必要な部分のみが把握されている可能性があり、場合によっては各分野の谷間に落ちてしまっていることも推測される。しかし、地域住民が生活者であることを踏まえれば、地域の各部門の専門職は SC の要素を分野横断的に共有し、協力して地域活動を展開することが望まれる。

論文審査結果の要旨

1) 論文要旨

本論文は、自然環境を始めとする、社会文化的脈絡の影響を強く受けると考えられる里山の人々の暮らしに着目している。特に里山のソーシャル・キャピタルについて明らかにしながら、その特徴と健康への影響について探究している。論文は2部構成であり、研究Ⅰでは、予備調査をふまえて里山に暮らす高齢者10名に半構成的面接による質的研究を行なった。“近所を中心とする人間関係”、“地域への意識・態度”、“地域内の関係性”、“自然との関係性”の4つの領域による14のカテゴリーと36のサブカテゴリーを導き出し、ソーシャル・キャピタルの構造化を試みている。その結果、重要なソーシャル・キャピタルの要素には「人間関係の絆」、「集落のまとまり」、「文化や伝統の継承」、「自然との共生」があった。研究Ⅱでは、研究

Iで導き出された要素から質問項目を作成し、里山と都市部に在住する427名に量的調査を行った。研究Iで明らかにされた16の独自の項目を加えたソーシャル・キャピタルに関する36項目による因子分析により、里山と都市部のソーシャル・キャピタルの構成因子を抽出した。里山は、5因子構造（“近所関係の質”、“地域への愛着”、“自然との共生”、“信頼感”、“地域参加”）を示した。都市部は“地域参加”を除く4因子構造であり、里山の低位尺度得点は都市部に比べ全てにおいて高かった。さらに、健康関連QOL（SF-8）の身体的健康と精神的健康の8項目を従属変数とした重回帰分析により里山と都市部の健康への影響を検討した。里山の“地域への愛着”と精神的健康に有意差が認められた。これらの結果から、今後の地域保健活動で質的情報を重視すること、ソーシャル・キャピタルの施策立案、活動の各部門の横断的な協議・協働について検討し提言を試みている。

2) 審査結果

審査では、前期の審査の指摘に対する修正内容を確認した。序論並びに研究目的、文献検討、研究I・IIから導き出された看護への示唆を提言に繋げながら、看護の視点からの記述を熟考し加筆すること、提言は具体的に示すこと。インタビューガイド、量的調査における調査項目の抽出過程を加筆すること、研究Iで明らかにされたカテゴリーの関係性を語りから検討すること、タイトル等にあるソーシャル・キャピタルの特徴と論文に規定している定義との整合性を検討すること、要旨および要約は指摘に対応して加筆・修正するなどであった。

審査委員会は、ほぼ、指摘された内容の修正が行われていることを確認した。その他、本文中のいくつかの説明に関する記載を再検討すること、ソーシャル・キャピタルの概念図の微調整、導き出されたカテゴリーの関係性の検討、看護への示唆を結論に加筆すること、文献の記載を正確に行うことなどについて加筆・修正を求めた。審査委員会は再度提出された論文が適正に加筆・修正されていることを確認した。

本論文は、里山のソーシャル・キャピタルに着目し、失われつつある里山の強みを構造的に導きだし、都市部との違いを明確にしている。このことは、里山のソーシャル・キャピタルを基盤にした看護介入を検討していくうえで有用な知見である。特に様々な議論の中で、一般的な合意が存在していないソーシャル・キャピタルの考え方を看護の分野に持ち込み検討したことは、先駆的な視点をもった取り組みとして評価できる。今後、この研究から明らかにされた里山のソーシャル・キャピタルに着目した看護介入、すなわち人間関係の絆や集落のまとまりに着目しながら、文化や伝統の継承や自然との共生を尊重する看護実践を重ねることにより、わが国の多くの里山に暮らす人々の健康行動を支える看護活動への発展が期待できる。また、縦割り行政を乗り越えて、活動部門の連携や直に地域に入りこむことの必要性に気付くなど、研究者の今後の活動に期待ができる。加えて、里山のソーシャル・キャピタルを捉える尺度の洗練を目指した研究課題の発展に期待するものである。

以上により、本論文は独自性と学際的意義を有し、博士論文（看護学）として相応しいものであると判断し、学位規則第4条第1項に定める博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める。また、本学生を看護学における研究活動を自立して行うために必要な研究能力を有するものと認め、最終試験に合格したと判定する。